

吾妻山の火山活動解説資料（令和4年10月）

仙台管区气象台
地域火山監視・警報センター

大穴火口浅部の緩やかな膨張を示す変化は、8月下旬頃から停滞しており、顕著な火山活動の活発化は認められませんが、大穴火口周辺地下の温度上昇を示唆する変化等が引き続きみられますので、今後の火山活動の推移に留意してください。

大穴火口周辺では熱活動が継続しており、噴出現象が突発的に発生する可能性があることに留意が必要です。また、入山する際には火山ガスに注意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・地震や微動の発生状況（図1-②③、図2-④⑤、図3-②～⑤）

火山性地震は少ない状態で経過しました。

火山性微動は観測されませんでした。

・地殻変動の状況（図2-⑥～⑧、図3-①、図4～6）

GNSS 連続観測の大穴火口周辺の短い基線の一部では、5月頃から大穴火口浅部の緩やかな膨張を示すと考えられる変化が観測されていましたが、8月下旬頃から停滞しています。浄土平観測点（大穴火口から東南東約1km）に設置している傾斜計では、5月頃から概ね西（大穴火口方向）上がりの緩やかな変化が継続していましたが、8月23日頃から緩やかな西（大穴火口方向）下がりに変化しています。

GNSS 連続観測の吾妻山周辺の長い基線の一部では、5月頃から吾妻山深部の膨張の可能性を示す変化が観測されていましたが、8月中旬頃から停滞しています。

・噴気など表面現象の状況（図1-①、図2-①、図7～8）

大穴火口の噴気の高さは200m以下で経過し、大穴火口付近及びその周辺の噴気の状況に変化は認められませんでした。浄土平3監視カメラの熱映像データの解析では、9月頃から大穴火口周辺の一部の地熱域で面積がわずかに拡大していますが、熱活動全体としては大きな変化はみられません。

・火山ガスの状況（図9）

大穴火口の北西に設置している火山ガス観測装置による観測では、SO₂（二酸化硫黄）とH₂S（硫化水素）の濃度比^{*}は7月頃から2018～2019年の火山活動が活発化した際と概ね同程度の値で推移し、8月下旬からはやや低下したものの、静穏期と比較すると依然高い濃度比となっています。SO₂とH₂Sそれぞれの濃度は8月頃から引き続き高い値が観測されています。

※噴気中の各種火山ガスは地下のマグマに由来するものであり、その濃度や成分毎の比率（濃度比）の変化は、火山の活動状態の指標のひとつと考えられています。

・全磁力変化の状況（図2-③、図10～12）

全磁力連続観測では、大穴火口周辺地下の温度上昇の可能性を示す変化は弱まりながらも継続しています。

6日、7日に大穴火口周辺で実施した全磁力繰り返し観測では、前回実施した2022年10月以降、大穴火口周辺地下の温度上昇の可能性を示す変化が観測され、連続観測のこの期間の長期的な傾向と概ね一致した結果でした。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページで閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和4年11月分）は令和4年12月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省東北地方整備局、国土地理院、東北大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

本資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の「数値地図50mメッシュ（標高）」を使用しています。

○ 活動評価

大穴火口浅部の緩やかな膨張を示す変化は8月下旬頃から停滞しており、火山性地震の回数も少ない状態で経過している等、顕著な火山活動の活発化は認められません。ただし、全磁力の連続観測では、大穴火口周辺地下の温度上昇の可能性を示す変化が継続しています。また、火山ガスの連続観測では、SO₂とH₂Sの濃度比は静穏期と比較すると依然高い値となっています。今後の火山活動の推移に留意してください。

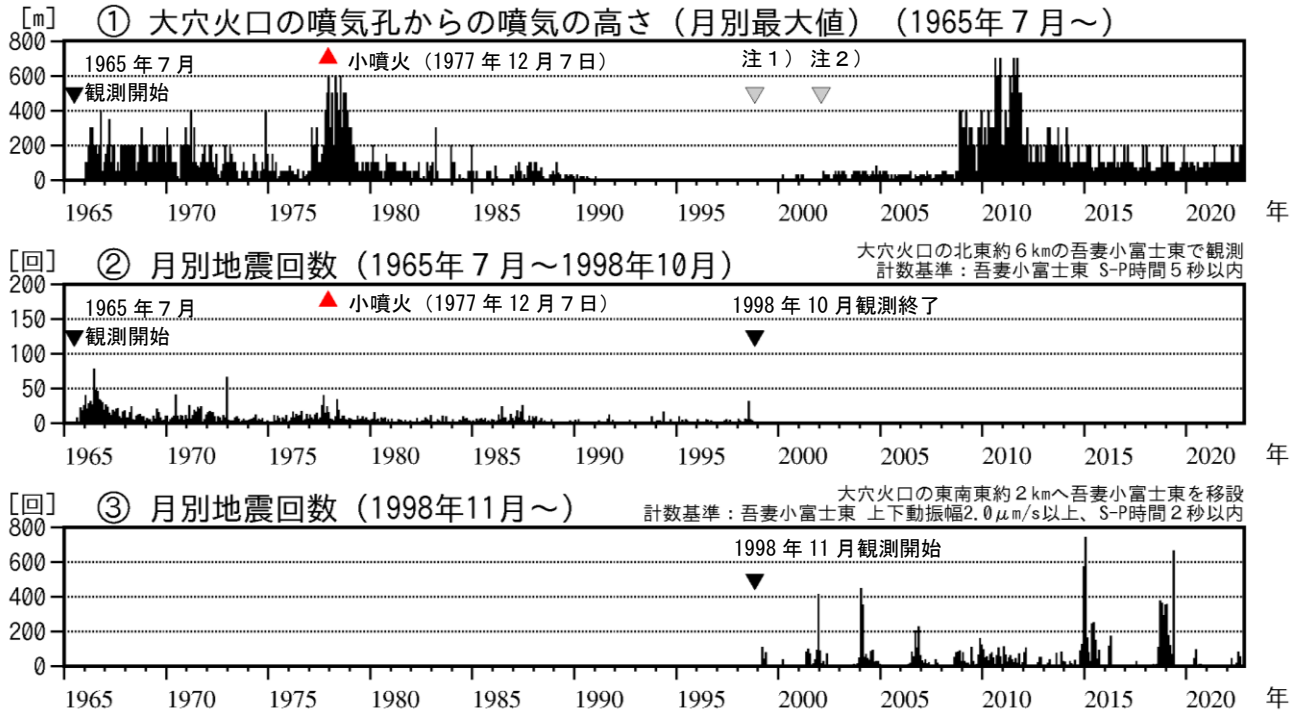


図1 吾妻山 長期的な火山活動の経過（1965年7月～2022年10月）

- ・注1）1998年以前は福島地方気象台（大穴火口の東北東約20km）からの目視観測で、1998年からは監視カメラ（大穴火口の東北東約14km）による観測です。
- ・注2）2002年2月以前は定時（09時、15時）及び随時観測による高さ、2002年3月以後は24時間観測による高さです。

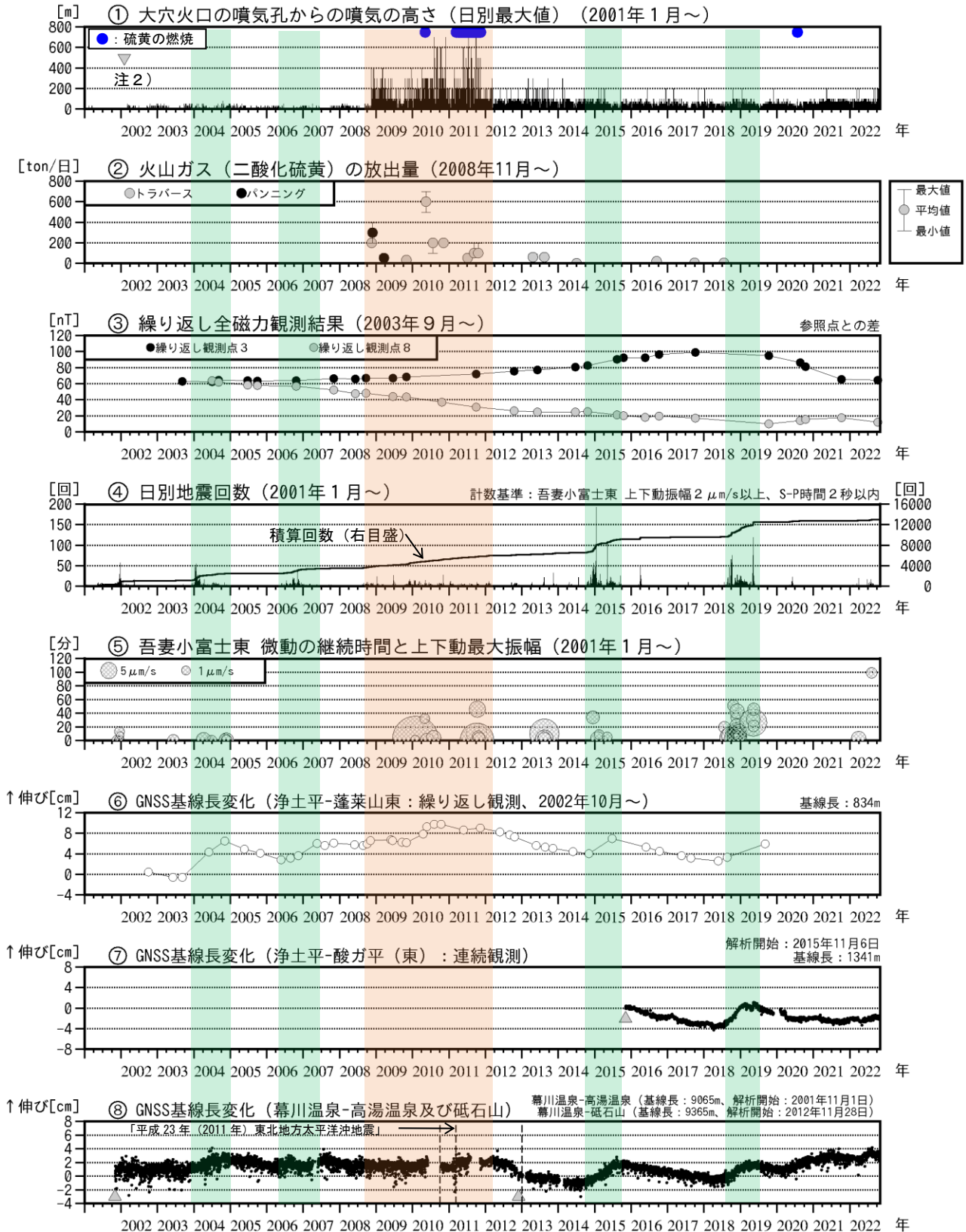


図2 吾妻山 中期的な火山活動の経過（2001年1月～2022年10月）

- ・注2) 2002年2月以前は定時(09時、15時)及び随時観測による高さ、2002年3月以後は24時間観測による高さです。
- ・③繰り返し観測点3及び8はそれぞれ図11の全磁力繰り返し観測点③⑧に対応しています。
- ・⑦及び⑧はそれぞれ図4のGNSS基線①⑥に対応しています。
- ・⑧「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」に伴うステップを補正しています。
- ・⑧高湯温泉観測点は約300m東に位置する砥石山観測点に移設しました。
- ▲: 解析開始を示します。・GNSS基線長は、2010年10月及び2013年1月に解析方法を変更しています。

2003年以降、吾妻山深部及び大穴火口浅部の膨張を示す地殻変動や地震活動の活発化（緑色部分）を繰り返しています。

2008年から2011年にかけて、噴気・地熱活動が活発な状況でした（橙色部分）。

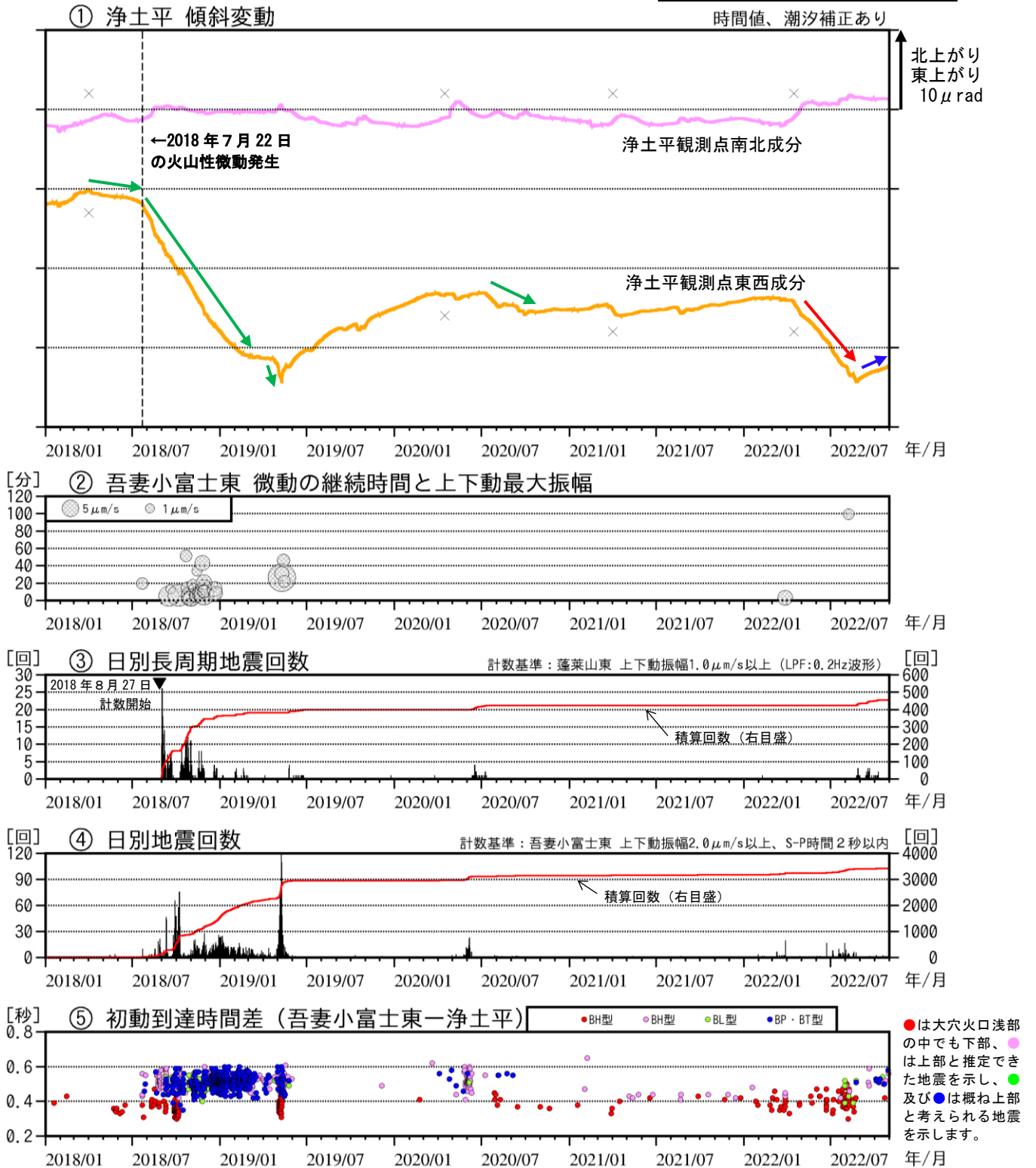


図3 吾妻山 火山活動経過図（2018年1月～2022年10月）

④日別地震回数に③長周期地震の回数は含まれていません。

浄土平傾斜計のデータは、長期トレンドを除去しています。×：融雪期には北西上がりの変動がみられます。

7月中旬頃から8月頃にかけて火山性地震はやや多い状態で経過していましたが、今期間は少ない状態でした。8月下旬から10月上旬にかけて長周期地震[※]が発生していました。

浄土平観測点（大穴火口から東南東約1km）に設置している傾斜計では、5月上旬頃から概ね西（大穴火口方向）上がりの緩やかな変化（赤矢印）がみられていましたが、8月23日頃から緩やかな西（大穴火口方向）下がりに変化（青矢印）しています。2018～2019年には、火山活動活発化に伴う傾斜変動が、2020年には大穴火口浅部の緩やかな膨張を示す変化が観測されていました（緑矢印）。

※ 長周期地震とは周期が10秒程度と長い地震です。浅い領域の熱水や火山ガスが関与していると考えられます。

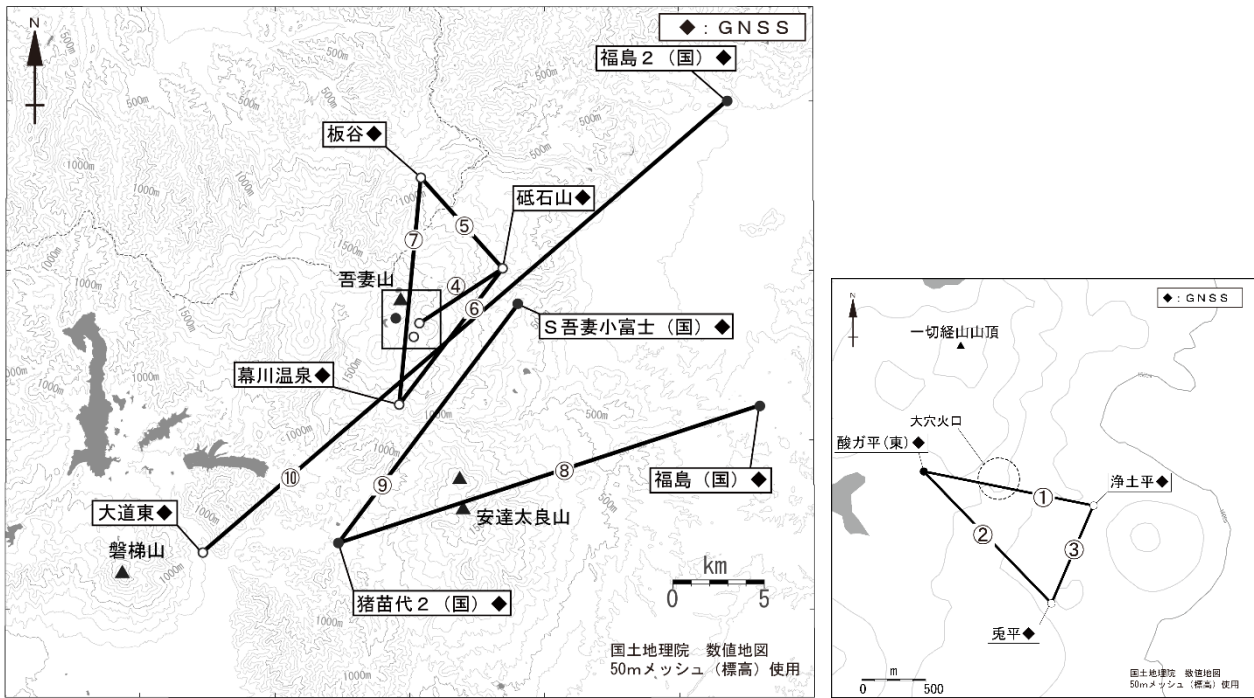


図4 吾妻山 GNSS 観測基線図

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 左図の四角囲みは右図の表示範囲を示しています。 （国）：国土地理院 （東）：東北大学

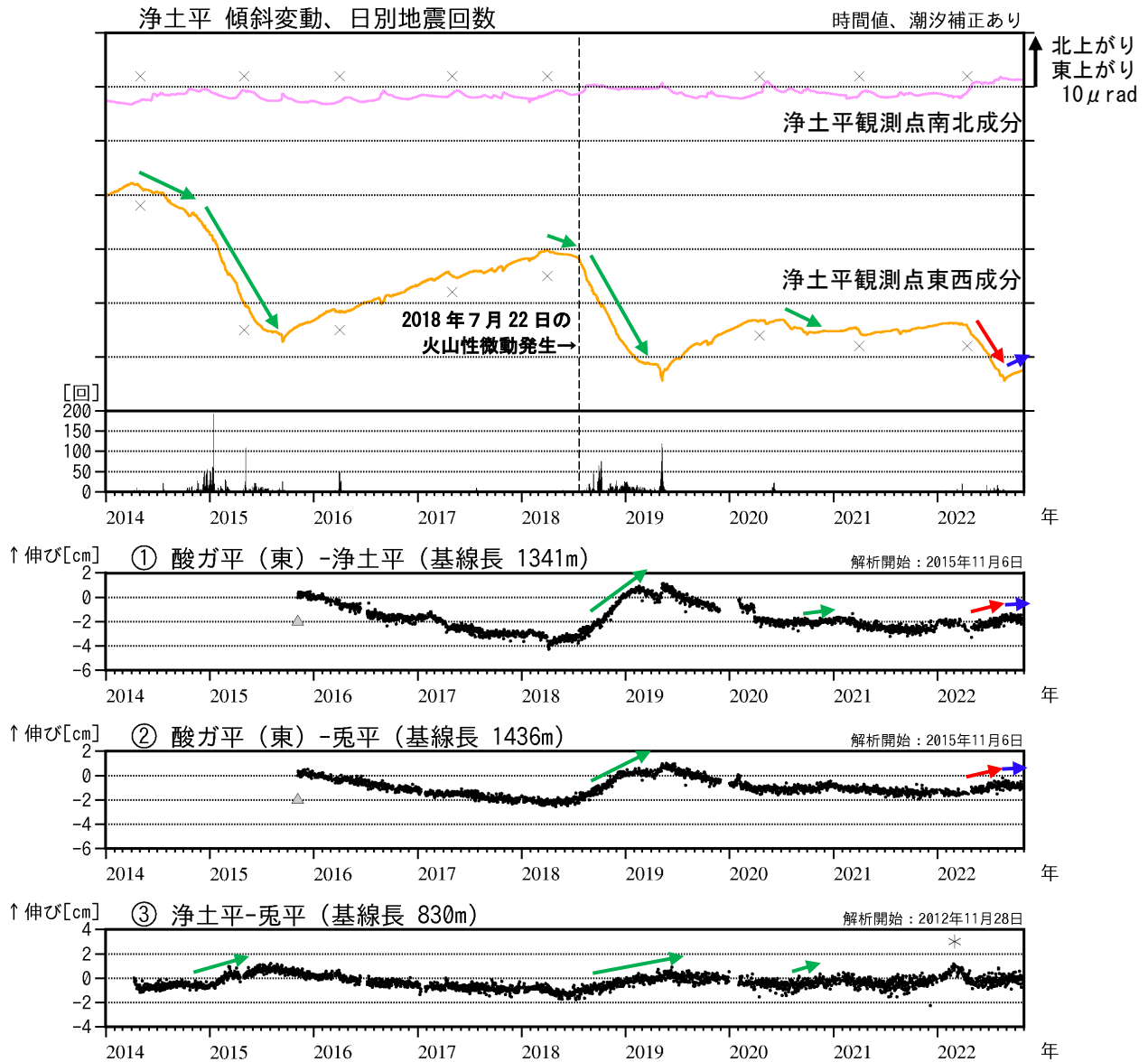


図5 吾妻山 大穴火口浅部の地殻変動（2014年1月～2022年10月）

- ・傾斜計の浄土平観測点は大穴火口のほぼ東に位置するため、大穴火口浅部の膨張による傾斜変化は東西成分に大きく現れます。
- ・①～③は図4のGNSS基線①～③に対応しています。　・空白部分は欠測を示します。
- ・（東）は東北大学の観測点を示します。　・浄土平傾斜計のデータは、長期トレンドを除去しています。
- ▲：解析開始を示します。　×：融雪期には北北上がりの変動がみられます。
- *：積雪等に起因すると考えられる変化で、火山活動によるものではないと考えられます。

大穴火口周辺の短い基線の一部で5月頃から伸びの変化（赤矢印）が認められていましたが、8月下旬頃から停滞しています（青矢印）。浄土平観測点（大穴火口から東南東約1km）に設置している傾斜計では、5月上旬頃から概ね西（大穴火口方向）上がりの緩やかな変化（赤矢印）がみられていましたが、8月23日頃から緩やかな西（大穴火口方向）下がりに変化（青矢印）しています。

2014～2015年及び2018～2019年には火山活動活発化に伴う変化が、2020年には大穴火口浅部の緩やかな膨張を示す変化が観測されてきました（緑矢印）。

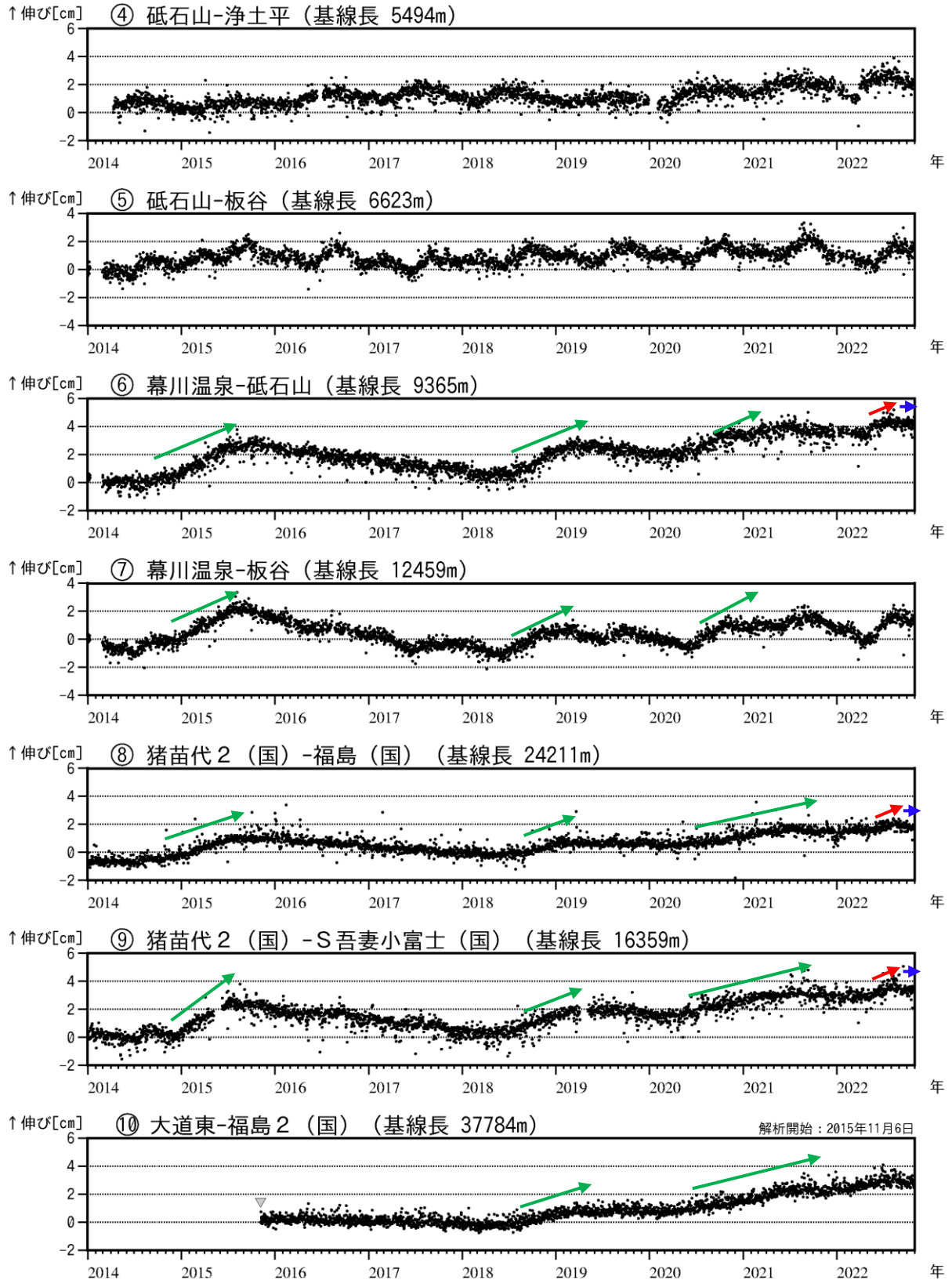


図6 吾妻山 吾妻山深部の地殻変動（2014年1月～2022年10月）

- ・④～⑩は図4のGNSS基線④～⑩に対応しています。
- ・空白部分は欠測を示します。
- ・(国)は国土地理院の観測点を示します。
- ▼：解析開始を示します。

GNSS連続観測の吾妻山周辺の長い基線の一部では、5月頃から吾妻山深部の膨張の可能性を示す変化（赤矢印）が観測されていましたが、8月中旬頃から停滞しています（青矢印）。

2014～2015年、2018～2019年、2020～2021年にかけて、吾妻山深部の膨張を示す変化（緑矢印）が観測されていました。

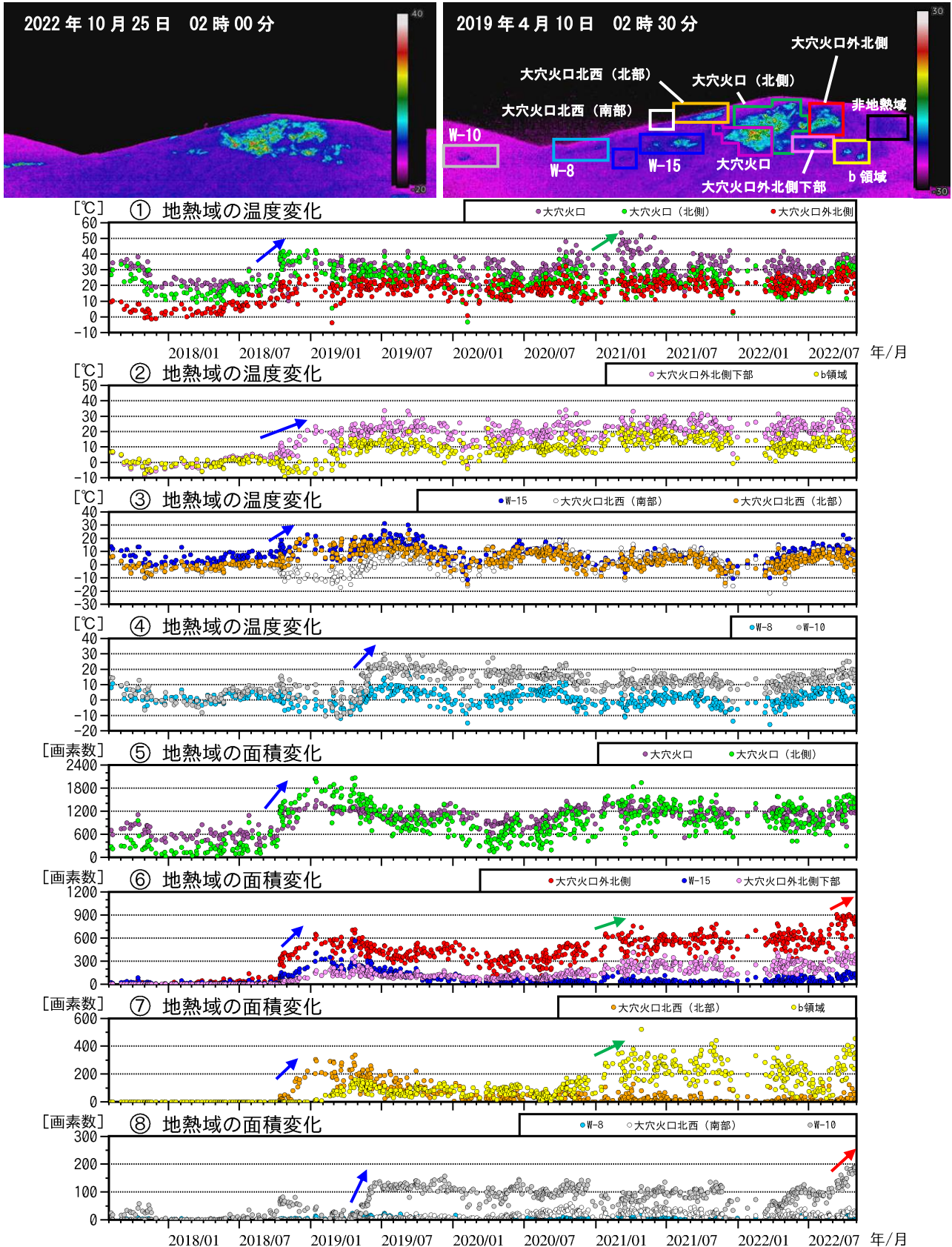


図7 吾妻山 監視カメラによる大穴火口周辺の地熱域の経過（2017年8月～2022年10月）

- ・①～④は各領域の最高温度と吾妻山の南約6kmのアメダス鷲倉の気温との差を示しています。
- ・⑤～⑧は領域毎に非地熱域（黒枠）の平均温度より5℃以上高い領域の画素数を示しています。数値が大きくなるほど、地熱域の面積が拡大していることを示します。・グラフ中の点の色は上図の枠線の色に対応しています。
- ・空白部分は天候不良等による欠測を表しています。
- ・2018年10月と2019年5月の火山活動活発化の際には、地熱域の面積拡大と温度上昇がみられました（青矢印）。

2021年1月から3月頃にかけて、大穴火口周辺の一部で地熱域のわずかな温度上昇や面積拡大がみられ（緑矢印）、その後は停滞していましたが、9月頃から大穴火口周辺の一部の地熱域で面積がわずかに拡大しています（赤矢印）。ただし、熱活動全体としては大きな変化はみられません。



図8 吾妻山 大穴火口周辺の噴気の状態（10月14日）

- ・左図：東北地方整備局が設置している浄土平監視カメラ（大穴火口の東南東約500m）の映像です。
- ・右図：上野寺監視カメラ（大穴火口から東北東約14km）の映像です。

監視カメラによる観測では、今期間、大穴火口の噴気の高さは200m以下で経過し、大穴火口及びその周辺の噴気の状態に変化は認められません。

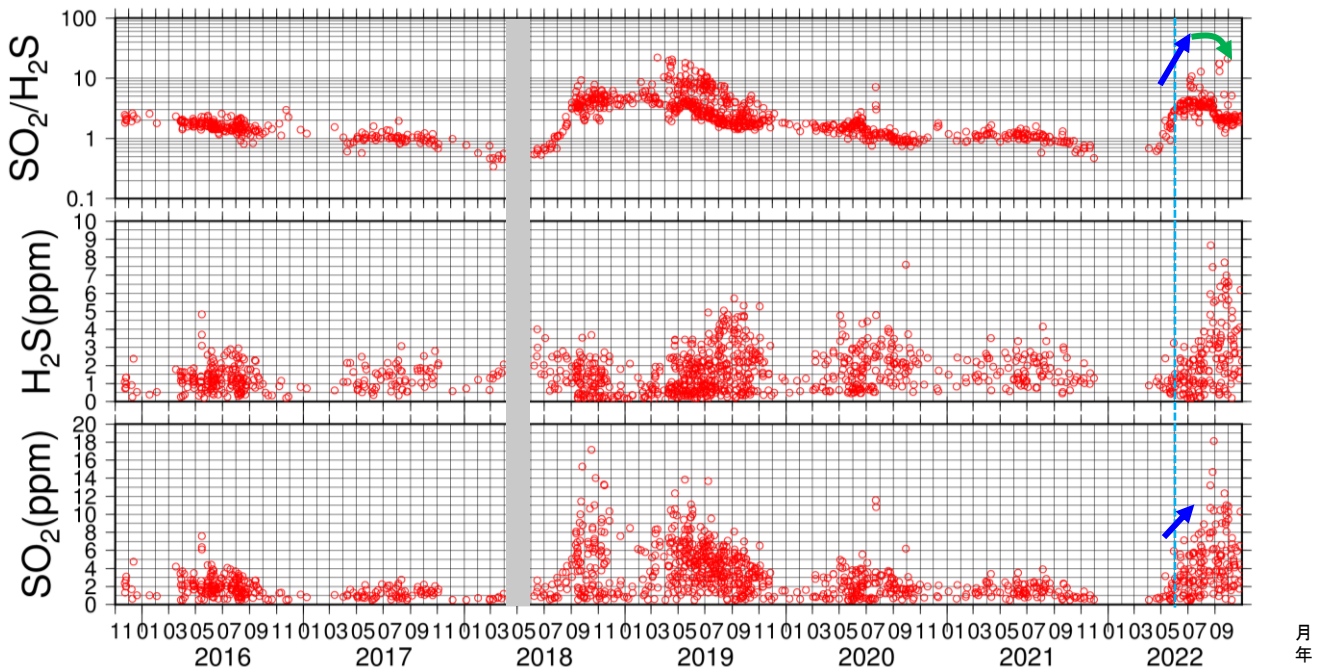


図9 吾妻山 火山ガス観測装置による観測（2015年11月～2022年10月）

- ・火山ガス観測装置では、噴気孔から流れてくる火山ガスと周辺大気との混合気体を測定しているため、測定される濃度（グラフ中段、下段）は、風向きや大気との混合の影響を受けて増減する場合があります。一方、複数の火山ガスの濃度比（上段）はこうした影響を受けにくいいため、火山活動評価の指標として有効です。
- ・青破線は火山ガス観測装置のセンサー交換を示し、それ以降のデータは感度補正を行っていません。青破線以前のデータは感度補正済みです。
- ・グラフの灰色部分は欠測を表しています。
- ・季節風が強まる冬期には観測点が大穴火口の北西側にある位置関係のため観測値を得にくい状況となります。
- ・2020年7月22日から23日にかけてみられた濃度比の一時的な増加及び二酸化硫黄濃度の増加は硫黄の燃焼によるものと考えられます。

火山ガス観測装置による観測では、 SO_2 と H_2S の濃度比（上段）は5月頃から上昇がみられ、 SO_2 濃度の上昇（青矢印）によるものと考えられます。7月頃からは、濃度比は2018～2019年の火山活動が活発化した際と概ね同程度の値で推移し、8月下旬頃からはやや低下しました（緑矢印）。9月頃からは濃度比は停滞していますが、静穏期と比較すると依然高い値となっています。 SO_2 と H_2S それぞれの濃度は8月頃から引き続き高い値が観測されています。

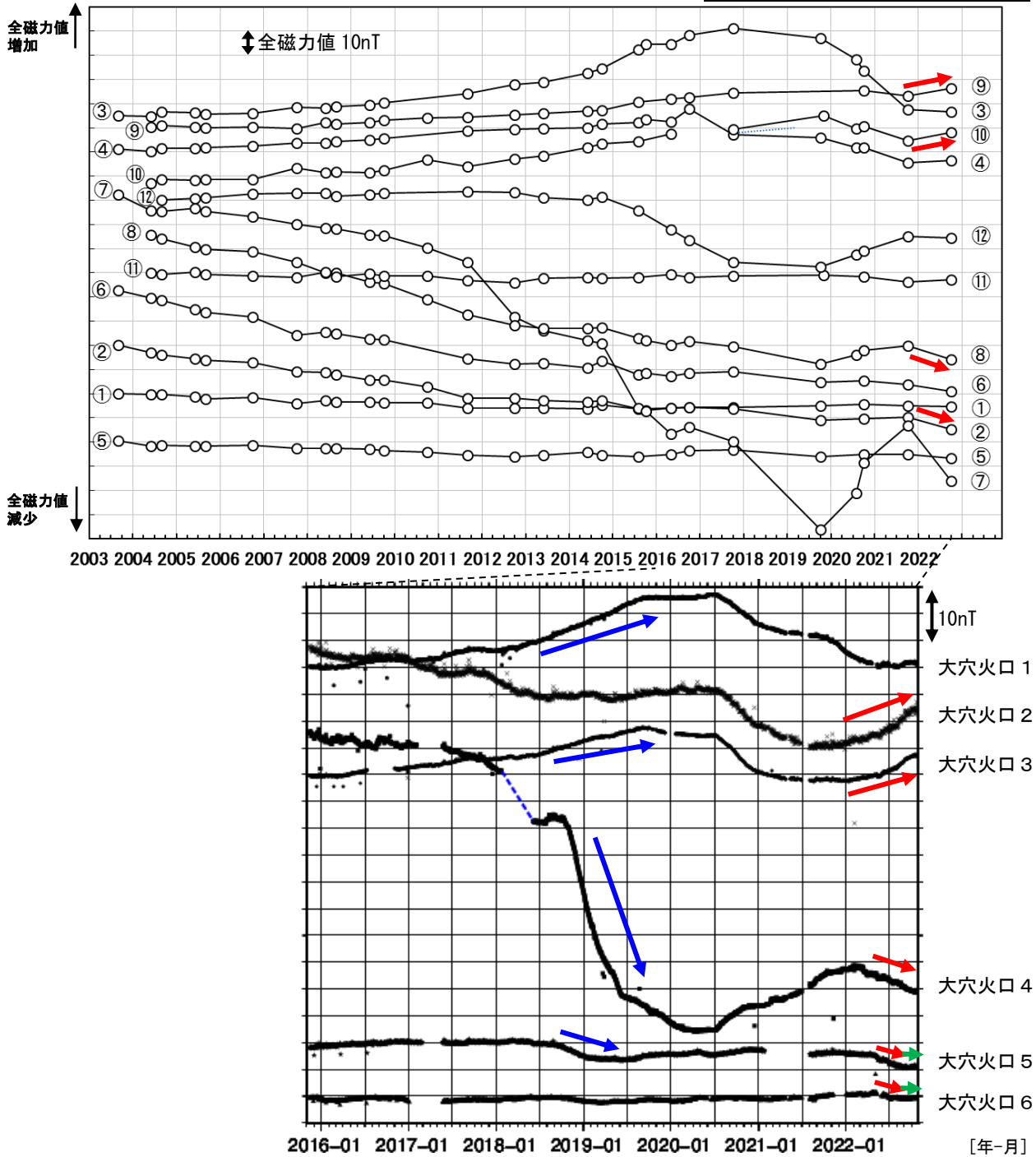


図10 吾妻山 全磁力繰り返し観測（上）及び連続観測（下）の全磁力値変化
（2003年9月～2022年10月）

- ・全磁力連続観測のデータは参照点（大穴火口の北東約6kmにある高湯観測点及び大穴火口の南東約16kmにある上葉木坂西観測点）で観測された全磁力値を基準とした場合の各日の00時00分から02時59分の平均値を示しています。
- ・青破線で示す観測点大穴火口4における全磁力変動は、観測機器を再設置したことによる人為的な変動です。
- ・青矢印は、2018年から2019年にかけて観測された全磁力値の変化を示しています。この変化は大穴火口北西地下の温度上昇を示すと考えられます。
- ・グラフの空白部分は欠測を表しています。

全磁力連続観測では、大穴火口周辺地下の温度上昇の可能性を示す変化は弱まりながらも継続しています（大穴火口5、6の全磁力値は4～6月頃から減少傾向、9月以降は停滞（緑矢印））。また、局所的な地下の温度上昇は続いている可能性があります（大穴火口2と3の全磁力値は2021年12月以降増加、大穴火口4は3月頃から減少）。

6日、7日に大穴火口周辺で実施した全磁力繰り返し観測では、前回実施した2021年10月以降、大穴火口周辺地下の温度上昇の可能性を示す変化（赤矢印）が観測され、連続観測のこの期間の長期的な傾向と概ね一致した結果でした。

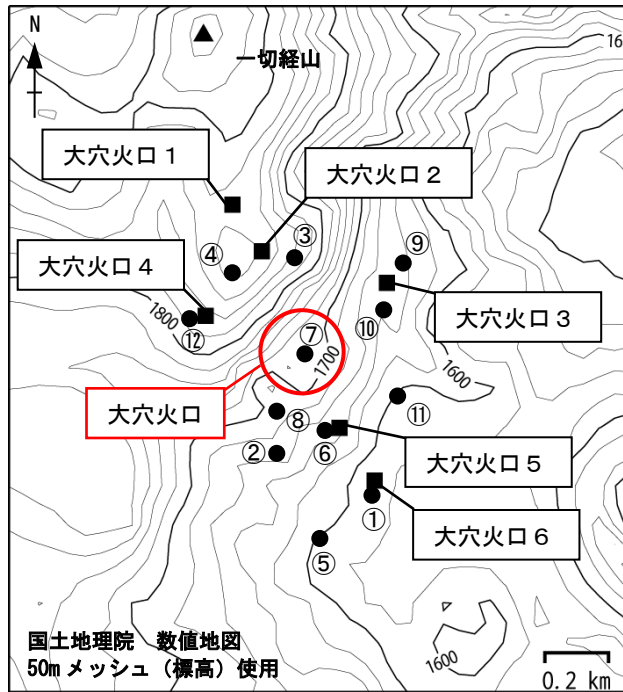


図 11 吾妻山 全磁力観測点配置図

■ : 全磁力観測点 (1~6) ● : 全磁力繰り返し観測点 (①~⑫)

【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方に帯磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内部の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、山頂直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えることで説明できます。下図に示すように、山頂部で観測した全磁力の値は、南側Aでは地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側Bでは強められて大きくなるのがわかります。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じることがあります。

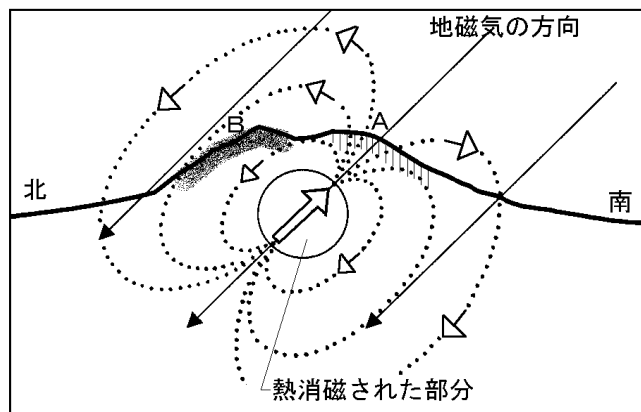


図 12 熱消磁に伴う全磁力変化のモデル

火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度

北側の観測点で 全磁力増加 南側の観測点で 全磁力減少	[消磁]		火山体内部の 温度上昇 を示すと考えられる変化
北側の観測点で 全磁力減少 南側の観測点で 全磁力増加	[帯磁]		火山体内部の 温度低下 を示すと考えられる変化

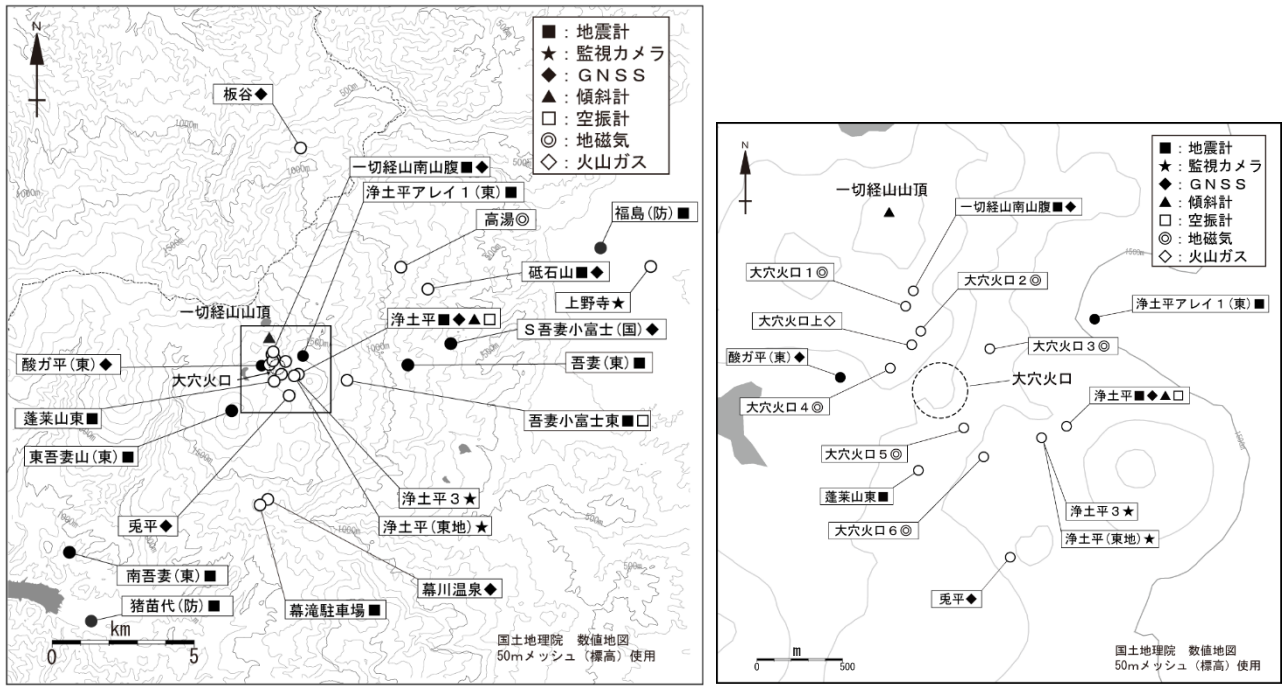


図13 吾妻山 観測点配置図

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

（東地）：東北地方整備局 （国）：国土地理院 （東）：東北大学 （防）：防災科学技術研究所
 左図の四角囲みは右図の表示範囲を示しています。